

復刻

## キネマ旬報

再建号

キネマ旬報社

第1号～第79号（1946年3月1日発行～1950年4月1日発行）

キネマ旬報社内の集合離散のため、戦後刊行の『キネマ旬報』の号数にカウントされていない幻の号



★ 総合監修：谷川建司 発売元：文生書院

第1回配本 (全3冊)	1～10号	1946年3月1日～1947年2月10日	計476頁	¥51,150 (¥46,500 税別) ISBN978-4-89253-626-7
	11～24号	1947年3月1日～1947年12月1日	計538頁	
	25～36号	1948年1月1日～1948年6月15日	計536頁	
第2回配本 (全4冊)	37～48号	1948年7月1日～1948年12月15日	計624頁	¥76,450 (¥69,500 税別) ISBN978-4-89253-627-4
	49～60号	1949年1月1日～1949年6月15日	計562頁	
	61～72号	1949年7月1日～1949年12月15日	計618頁	
	73～79号	1950年1月1日～1950年4月1日	計520頁	

文生書院

〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7

電話 03-3811-1683 Fax 03-3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp



## 解説

たにかわたけし  
谷川建司 (早稲田大学)

大正8年(1919年)に創刊された『キネマ旬報』は、誌名に敵性用語である“キネマ”が入っていたことから昭和15年(1940年)12月の演劇映画雑誌第一次統合勧告によって735号を以て廃刊となり、代わりに『映画旬報』が刊行されるものの、昭和18年(1943年)12月には第二次統制によってこれも廃刊させられた。それから凡そ2年3か月、戦前からの同人、飯田心美を編集発行人とし、ほかに水町青磁、友田純一郎、滋野辰彦、村上忠久の計5名が編集責任者という形で、京橋区新富町に編集部を置いて戦後の再建第一号が発行された。伝えられている話では、戦前の創刊時からの主宰者であった田中三郎の許を、終戦後まもなく水町、友田らが訪れて『キネマ旬報』再建の相談を持ち掛けたところ、自ら再建する意思の無かった田中は快くこれを受け入れ、誌名を譲ったのだという。

昭和21年(1946年)3月1日発行の再建第1号巻頭の「キネマ旬報再建の辞」には、5人の編集責任者連名で、

映画文化の指標となれ！ とは既に凡ゆる映画雑誌の使命であつたが、果してそれを純粹に遂行し実践したものがあつたらうか。われわれは過去から将来へ、それを遂行し、実践しやうとする。

- 一、新時代の映画作品の指標
- 一、新時代の映画全般の報道と調査
- 一、新時代の映画興行確立

等々は直面せる一部にすぎぬ。われわれの遂行し、実践すべき命題はこの他に山積してゐる。

と高らかに宣言し、スタートした。用紙確保の困難などもあったであろう、第2号は2か月後の5月1日発行となり、以後、月に2~3回刊行の旬報を名乗りながらも実際には月に1回のペースでの刊行が、翌昭和22年(1947年)の6月まで続き、昭和22年(1947年)7月1日発行の第15号以降は、正月などにはたまに月に一回のこともあったものの、原則として毎月1日と15日の2回発行が定着した。

基本的な特徴としては、何よりもまずは戦前の『キネマ旬報』のスタイルをそのまま踏襲するという点であり、邦画・洋画ともに扱うと共に、個々の作品の芸術性だけでなく、興行面や映画会社の経営面などについても目配せするという点で、今日に至る『キネマ旬報』の、映画に関わる全ての人にとってのサロンの役割が意識され、運営されていたと言えるだろう。

書き手に関しては、まず邦画・洋画を問わず、編集責任者の飯田、水町、友田、滋野、村上が毎号健筆を振るったのに加えて、早田秀敏、筈見恒夫、北川冬彦、眞木潤、今村太平、岩崎昶、清水晶、袋一平、清水千代太、双葉十三郎、登川尚佐(登川直樹)、淀川長治、上野一郎、野口久光、旗一平、林勝俊、南部圭之助、山本恭子、大黒東洋士、清水俊二、時実象平、植草甚一、亀井文夫、岡俊雄といった、その後長く日本の映画ジャーナリズムを牽引していく常連評論家たちがそれぞれの得意分野で執筆陣に加わった。

加えて、たとえば稲垣浩、伊丹万作、黒澤明、吉村公三郎、新藤兼人、豊田四郎、小津安二郎、五所平之助、衣笠貞之助、溝口健二、市川崑、藤本眞澄、森岩雄、永田雅一、城戸四郎あるいは片岡千恵藏、杉村春子、大河内傳次郎、宇野重吉、高峰秀子といった、監督、プロデューサー、俳優として映画製作の第一線にて活躍している者たちもまた折に触れてそれぞれの与えられたテーマで原稿を執筆し、更には、滝



口修造、長谷川<sup>じよざかん</sup>如是閑、中野好夫、高見順といった文化人らも、特集などに際しては寄稿を求められ、誌面に厚みを与えていた。

結果的に最終号となった、昭和25年（1950年）4月1日発行の再建第79号の「編集後記」において、水町青磁は「読者諸君の要望が、ファン雑誌から、だんだん研究誌の方へ向いて来てるのが、本誌の賣行きから察しられる。随つて今後は、ますます本誌の本領を発揮してゆきたい」と述べているが、これをどう理解すればよいだろうか。「賣行き」というのが、購読先が大学などの研究機関の比重が高まってきた、というような意味をも含んでいるのか、それとも発行部数の減少に対して、部数は少なくとも質で勝負する、と強がりを行っているのか定かではないが、少なくともこの時点ではこの第79号でもって終刊となるような予兆は感じ取ることが出来ない。

だが、再建『キネマ旬報』の中心的役割を担い、かつ三英社という別の会社名義での出版ながら実質的にキネマ旬報同人による別雑誌として、『キネマ旬報』と同じ住所を編集部として刊行されていた『映画物語』の編集長も兼ねていた水町青磁は、第79号の編集後記を書き終えた直後の3月4日夜に新橋駅で列車に飛び乗ろうとしてホームと列車の隙間に落ち、あっけなく世を去ってしまったのである。

その後『キネマ旬報』発行権を巡って二つの組合の間で争議が起きて刊行がストップした後、半年後の『キネマ旬報』は新たに清水千代太を編集発行人として、品川区小山に編集部を設けて復刊第1号が刊行され、以後経営者や編集部の場所を何度も変えながら今日に至っている。



# 【復刻版】 占領期 を中心とした 『キネマ旬報』 後継誌

## 『アメリカ映画』 (アメリカ映画研究所／編集＝「キネマ旬報」同人)

第1号～第21号 (1946年11月1日発行～1948年10月発行) まで  
アメリカ占領政策に沿って発行された。

第3回配本 (全2冊)	1～11号	1946年11月1日～1948年1月20日	計459頁	¥35,200 (¥32,000 税別) ISBN978-4-89253-653-9
	11～21号	1948年2月20日～1948年11月20日(終刊)	計440頁	

## 『映画新報』 (映画新報社)

第1号～第25号 (1950年8月1日発行～1952年3月15日発行) まで  
田中三郎が発行編集人として刊行。『キネマ旬報』と題せなかったのは権利売却による。

第4回配本 (全2冊)	1～10号	1950年8月10日～1951年3月1日	計574頁	¥42,350 (¥38,500 税別) ISBN978-4-89253-640-9
	11～25号	1951年4月1日～1952年3月15日	計518頁	

## 『映画春秋』 (映画春秋社／編集＝「キネマ旬報」同人)

第1号～第34号 (1946年8月1日発行～1950年4月10日発行) まで  
キネマ旬報から派生した映画論壇誌。映画言説資料としての重要な雑誌。

第5回配本 (全3冊)	1～5号	1946年8月15日～1947年3月15日	計430頁	¥46,200 (¥42,000 税別) ISBN 978-4-89253-646-5
	6～11号	1947年4月15日～1948年2月10日	計490頁	
	12～18号	1948年3月10日～1948年9月10日	計476頁	
第6回配本 (全3冊)	19～25号	1948年10月10日～1949年7月10日	計548頁	¥51,150 (¥46,500 税別)
	26～30号	1949年7月10日～1949年12月10日	計512頁	
	31～34号	1950年1月10日～1950年4月10日	計476頁	

★原本の状態等で、価格が変更になる可能性があります。